

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

昭和初期の幼稚園を映すテキスト

浜口順子

「お家と幼稚園（オウチ ト エウチエン）の巻」（昭和四年四月発行）

倉橋惣三が編輯顧問になって二年目、『キンダーブック』第二輯第一編では、子どもの日常生活の舞台そのもの（家庭と幼稚園）が主題に取り上げられた。その前の第一輯では、「米」「乗物」「桜」「養蚕」「皇室」「犬」「お正月行事」「雪と氷」「お人形」「電気」というテーマが並んでいたが、ここへ来て、最も子どもの生活に密着したものが登場した感がある。全ページを通じて普段の子どもの姿が描かれているのは初めてだ。

一方、この号から、表紙右上に「賜台覧」と「文部大臣推薦」の文字が見える。大正十五年の幼稚園令公布により、幼稚園は小学校から独立した教育機関として公認されたといえる。その教育を促進するためのテキストとして登場した絵雑誌がキンダーブック、と一般的には評価されている。発刊後一年余りにして、幼稚園直販方式という独特の販売スタイルが軌道に乗り、現場保育者や家庭への販路を確実に広げる一方で、台覧、すなわち皇族関係の方に

も読まれるようになり、さらに国（文部省）からのお墨付きも得た。昭和ひとケタ時代は、教育現場が厳しい軍国主義的統制を受ける前ではあったが、このような位置付けを得ることが、当時の日本においては、この絵雑誌、および幼児期教育が、社会的認知を享受したことで同義となるのだろう。



▲画像1

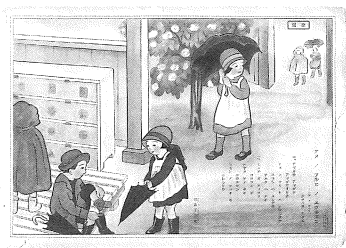
表紙には遠足の風景（画像1）。巻末に別紙で付いている解説部分には、「桜花爛漫たる春の丘に、幼稚園の先生を中心とする幼き園児たちの可愛らしいピクニックの有様を描いたもの」とある。中央の、帽子をかぶった男児と女児は、植物図鑑だろうか、（当時の）キンダーブックのような横広で薄い冊子を手にはしている。よく見れば、足元に咲く野の花を観察している風情。キンダーブックが、幼稚園令で新しく保育項目に加わった「観察」を促す教材として制作されたことを考えると、当然の構図かもしれない。しかし背景には、ラッパを吹く子どもの姿や、新鮮な空気に向かつて腕を伸ばす女児、ふざけじゃれ合う男児たちの姿も見えるので、子どもが好きなことをしてもいい、自由な雰囲気は伝わってくる。

当時の幼稚園生活

この「お家と幼稚園の巻」は全部（表紙含）で18ページあり、初めの9ページに幼稚園、次の6ページに家庭で子どもが過ごす様子、「附録」（戦国時代の子ども）楠木正行が、父・

正成の死後、村で遊ぶ姿）1ページ、最終ページは「オモチヤ」一覽、という内容である。幼稚園で遊んでから家に帰って過ごすまでの「子どもの一日」を追いながら読むという構成になっている（この号の五年後の第七輯第三編で再び「幼稚園」がテーマとなるが、そこでは行事を追って一年間の流れが描かれている）。大半の絵が、都会の裕福な家庭の子弟をモデルに描かれているが、「デンエン」の農村の子どもの様子も2ページある。

今回は、幼稚園の様子が描かれているページを順に紹介してみたい。

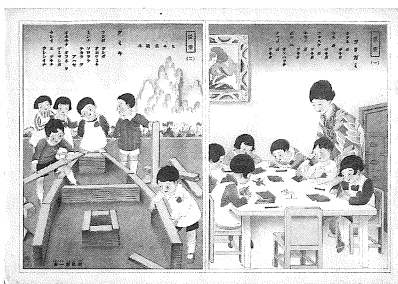


▲画像2

まず、雨の日の登園風景から（画像2）。下駄箱、すのこなどは今と変わらないが、肩から掛ける幼稚園バッグの代わりにランドセルを背負っている女の子、手ぶらの子どもも見える。傘と長靴は黒色、持っているだけ特別なのかもしれない。

次は「授業」のページ（画像3）。現代の一斉か設定遊びであろう。折り紙（授業一）と積み木（授業二）で遊ぶ光景。解説では、折り紙も

積み木もフレーベル恩物の一部に属するものとの説明がある。しかし、絵の中の子どもたちはツルなどを作っているの、恩物の幾何学的折り紙ではない。次の文が、日本の伝統的折り紙の伝承であることを明らかにする。「オフネガデキタ ツルガデキタ フクスケガデキタ キモノガデキタ ボクハ オソハツテ ナマツガデキタ」。

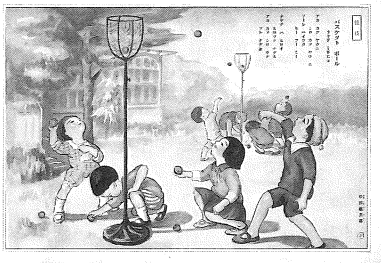


▲画像3

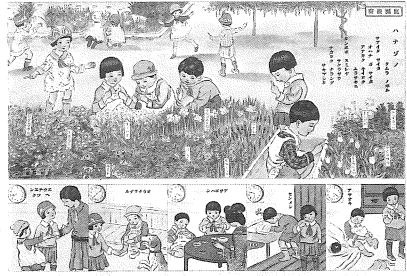


▲画像5

次は「模倣遊戯」とある。「ヤオヤ」という看板のある小屋の周りに、売る人、



▲画像6



▲画像4

積み木は、解説にもあるように、「ヒル氏積み木」である。日本で初めてこれを幼稚園に取り入れた東洋幼稚園の岸邊福雄が、倉橋と共にキンダーブックの編輯顧問であることを考えると、遊具環境の紹介、啓発への意思を感じる。

次は、見開きで「庭園観察」と「室内遊戯」の図だ（画像4、5）。下部に、一日の流れが時計と共に描かれている。当時の幼児の模範的な一日が示唆されている。「6時20分朝起き、6時50分洗面、7時20分朝ごはん、8時10分お家を出る、8時45分幼稚園へ着く、2時10分幼稚園を出る、2時20分途中、道草を喰わずに（道草を食う図）、3時30分おやつ（まげ結いの母親の図）、7時ラジオ、8時おやすみ」。夕飯や入浴が入っていないのは不可解であるが、夜8時就寝というのは現代と大差がない。

その次は「競技」とあり、玉入れの図だ（画像6）。赤のかごと、白のかごで競うのは同じだが、「バスケットボール」という名で呼ばれていたようだ。



▲画像7

買う人の人だかりが出来ている（画像7）。子どもが入れるほどの大きい家が設えられた、スケールの大きいごっこ遊びは、大正末から東京女子高等師範学校（女高師）附属幼稚園で始まっていた誘導保育をモデルにしていると考えられる。このころの同幼稚園は、関東大震災で園舎が全壊した後、まだバラックの園舎で保育していた。その中で、保育者たちが、絶対的な物資不足の中、廃材などのあらゆる材料を生かして、まさに創造的に、子どもたちのアイデアを生かした教育環境を手ずから作り出し、創意工夫を重ねて継続的発展的なごっこ遊びを繰り広げていたのが誘導保育の始まりであった^註。誘導保育は、昭和七、八年以降、『系統的保育案の実際』に結実し、倉橋惣三による理論化を背景に、戦後にかけて日本の代表的な保育案になっていく。

戸外大型遊具のカタログ

その後に来るのは、「運動場と運動具」という見開きページだ（画像8、9）。実際にこれほど所狭しと大型遊具が置かれていれば、子どもの遊ぶスペースがなくなってしまうだろう。とはいえ、大型遊具の合間で、じゃんけんぼん、鬼ごっこ、ロープの輪を使う電車ごっこ（「シングルベルス」とある）、模型の船（クミタゲンカン）を引っ張る子どもの姿もある。大型遊具の中には、現代にあまり見られないもの、呼称の違うものなどがあって面白いので紹介しておこう。



▲画像8

画像8の右から、「ワクノボリ（現代のジャングルジム）」、「イスブランコ（片側に三人ずつ乗れる大きなもの）」、「カイトニス（小さいメリーゴーラウンド式）」、「カウシンモクバ（車輪付き木馬）」、「タンク（二人乗り戦車）」、「カイトンスベリダイ（かなり高度があり危なげに見える）」、「シーソー（今のシーソーとは違い、半弧型乗り物の両端に二人ずつ向かい合って座り、ゆらゆら揺らす）」、「リクジャウボート（押してもらおうと進む陸上の船）」、「カイトンシーソー（支点を中心に回るシーソー）」、「スベリダイ」、「ユウドウキヤウ（双方の脚台から吊るした水平の台の上に乗る遊動させる）」。

このページが、フレーベル館の社業である大型遊具製造販売の促進をも意図した構成であったことは間違いない。『フレーベル館一〇〇年史』によると、大正十四年七月に同社は、鉄製運動具の発売を開始しており、昭和二年十月に「ワクノボリ」が発売された。これは当時の女高師附属幼稚園主事（園長）堀七蔵が考案して同社に製作させたものだったという。

— 続く —

（お茶の水女子大学大学院）

▲画像9

注 津守真・及川ふみ他「誘導保育の成立のころ（昭和初期）——座談会——

『幼児の教育』第六十五卷第八号 一九六六年 pp.24-34